

箔押し異聞

高橋惟文

一 蒲田駅

平成十六年四月十一日、福島県K市の市立図書館に勤務する米倉理一（よねくら・りいち）は、半年前に退職した女性司書の結婚式に列するため上京した。

その司書の名は川田都紀恵といい、蔵書課長の米倉と五年間机を並べた間柄である。都紀恵は送別会の席で、「結婚式では課長にぜひ祝辞を…」と話していたが、米倉は気が進まなかった。「そついうことは館長が副館長に頼みなさい」と、やんわりと拒否したが、それには理由があった。実は、米倉は二十年前に離婚している。結婚に失敗していながら祝辞を述べるのは気が引けるのである。市職員の中で米倉の離婚を知る者は年々少なくなっている。都紀恵も米倉の離婚歴を知らない。結局、米倉は彼女に押し切られた形で結婚式に出ることになった。

米倉が結婚したのは二九歳の時だった。東京の大学で環境工学を専攻したことが市長の目にとまり、採用直後からK市の都市計画課に勤務し、環境浄化計画の策定などで手腕を発揮した。しかし、離婚した途端に周囲の米倉を見る目は急に冷たくなった。本来、離婚は私事であり公務とは無関係であるが、地域や住民との密着度がきわめて高い地方公務員にとって、離婚によるダメージは大きい。

それまでは周囲から「都市計画のエキス」ともてはやされ、長身の体で市庁舎を闊歩していた米倉も、いつか背を前かがみにして歩くようになった。また、コンタクトレンズを黒縁の眼鏡に変えて「変装」したりした。

別れた妻は真美子という名で、米倉の名が理一であることから、市長は結婚式で「真」と「理」を合わせて「真理カップル」と持ち上げたが、結婚十年目に破局が訪れた。しかも、それは米倉にとってこの上ないほどの屈辱が付されていたのである。

米倉が三日間の東京出張からもどった冬のある夜、家の中の家財道具は全て運び出されていた。それは、寝具や家電製品、米倉の衣類やゴルフ道具、文学全集にまで及んでおり、米倉は茫然自失の状態で畳の上に立ち尽くすしかなかった。妻の書き置きには「つ書いてあった。」「申しわけありません。悪いのは私です。捜さないでください」と。隣家の主婦

は「奥さんの従兄弟っていう若い男性が一年位前からよく見えてましたよ」と気の毒そうな顔で語った。

米倉にとって、妻が若い男と駆け落ちしたことはショックだった。それは、「都市計画のエキス」ともてはやされ、毎晩遅くまで仕事に没頭して妻をほったらかしにしたことの大きなついでであった。子どもがいなかった事も妻の駆け落ちに勢いがついたかもしれない。すぐに妻の両親が駆けつけ、畳に額をこすりつけるようにして娘の非を詫びた。そして一ヶ月ほど経って妻の印鑑が押された離婚届が郵送されてきたのである。それ以来、米倉は人と会うのが億劫になった。周囲の好奇の目に耐えられず辞表を出したところ、上司は「ほとぼりがさめるまで、図書館で仕事してみないか」と慰留してくれたのである。

図書館は教育委員会の所管であり、市長部局の都市計画課に比べれば絶好の「隠れ家」になった。この「隠れ家」生活も、今年で二十年目に入り、三年前には蔵書課長の辞令が出た。もはや、米倉が都市計画のエキスパートだったことを知る者は少ない。もっぱら新着図書を紹介する「図書館ニュース」の編集等に携わる毎日であるが、その仕事のほとんどは単独作業である。したがって、大勢を前に挨拶するのは億劫なのである。

来春、米倉は定年を迎える。時折、あの冬の「もぬけの殻」を夢に見ることはあるが、そこに妻の顔は出てこない。そのことがあってから一度として再婚を考えたことはなく八十歳になる母と二人で静かに暮らしている。

米倉は東北新幹線の終点東京駅で降り、JR京浜東北線の下り電車に乗り換えた。東京駅から先に足を延ばすのは久しぶりである。有楽町、新橋、浜松町、品川など、学生時代を思い出させる懐かしい駅が続く。東京駅を出て三十分ほど経った頃、電車は蒲田駅に着いた。そしてドアが開いた途端、いきなり軽快な音楽が車内に飛び込んできた。それは、映画「蒲田行進曲」の挿入曲である。それが客に乗降を促すベル替わりであることはすぐに分かったが、「JRもここまでやるか」と米倉は独りでに笑みがこぼれた。

「蒲田行進曲」は、米倉が長い間こだわり続けている映画である。それは昭和五十七年秋に封切られた作品で、劇作家「つかこうへい」の直木賞作品を深作欣二監督が映画化したものである。この映画は松竹作品でありながら、内容や背景は東映そのものであり、俳優間の友情や軋轢がモチーフになっている。配役は、白塗りの時代劇俳優に風間杜夫、その風間に寄生してチョイ役にありついている大部屋俳優に平田満、そして風間の子を身ごもり平田満に「払い下げ」られる無名の女優に松坂慶子という顔ぶれである。当時の松坂

慶子は人気がピークに達しており、妊娠して捨てられるという汚れ役には難色を示したという。また、撮影中も監督と何度か衝突したらしいが、皮肉にも松坂はその映画で演技力を高く評価されたのだった。

米倉は、その映画の内容があまりにも生々しいため、登場人物はすべて実在の俳優に違いないと思ったほどである。つまり、風間杜夫演じる白塗りの美剣士は「村之介」、大部屋俳優の平田満は「谷三」、そして無名女優の松坂慶子は「田子」ではないかと勝手に思い込むようになった。しかし、時に「村之介」は「美太郎」や「川介」に、そして「田子」は「山子」に入れ替わったりする。

米倉は、唯一心を許せる都紀恵にそのことを話したところ、彼女は「課長、何をおっしゃるんですか。あれは創作です。人気俳優の日常生活がいくら型破りでも、妊娠した女優を他人に押し付けるなんてこと、いま時、絶対にあり得ません。考え過ぎですよ」と一笑に付した。

もともと「蒲田行進曲」は小説である。したがって、何もそんなにムキになるようなことではないのだが、米倉にとつては長い間余韻が残る映画である。何はともあれ、作品の内容はおもしろかったし、松坂、風間、平田の三人が一緒に歌う蒲田行進曲の主題歌も大ヒットした。特に松坂慶子の音程の危なっかしさは、不思議な魅力があった。

都紀恵の結婚式と披露宴は、JR横浜から一つ先の桜木町で降りて徒歩十分ほどのG館で行われた。

キリスト教による結婚式に引き続いて露宴が始まった。新郎と新婦はともに二十五歳と若いカップルのため、招待客のほとんどは若者である。米倉の席は新郎新婦のちょうど目の前で、新郎が勤務する会社の社長と一緒のテーブルである。司会者が「新婦の上司であられました米倉理一様からお祝いのお言葉を…」と促され、米倉はマイクの前に立った。

仲人もいなければ新郎新婦の紹介もない。いきなりの祝辞で、それも新郎の上司より先にある。若い友人たちが実行委員となって運営する披露宴らしく、還暦を目前にした米倉にはまさに型破りの感がある。米倉は、新婦の心の優しさや常に誠実に仕事に当たっていたことなどを具体的に紹介しながら「お二人の末永い幸せを」と結んだが、自分の結婚の失敗を省みると「夫婦というものは…」などと大きなことは言えない。米倉の次に新郎の上司が挨拶に立ったが、それは祝辞というより自社のPRに終始していた。

乾杯が終わって一息入れると、右隣に座る四十代半ばと思える洋装の品のよい女性が「米倉さん、お一つどうぞ」と言う。米倉が軽く会釈してグラスを差し出すと、そのビールはあまり冷えていないためか、あつという間に泡が溢れて米倉の礼服の膝の上にかかった。女性は「ごめんなさい」と言い、急いでハンドバックからハンカチを取り出すと米倉のズボンの濡れた部分を何度も拭いた。米倉は「どうぞお気になさらないで…」と笑顔で応えたが、彼女は気が済まないようで「どうぞクリーニングに出してください。料金は私の方でお支払いしますから」といかにも申し訳なさそうである。

米倉はさりげなく座席表に目を通した。ビールをこぼした女性の名は「新婦知人 弥勒田里子様」と記されている。

米倉は弥勒田（みろくだ）という名前に憶えがある。今から四十年ほど前であるが、学生時代に東京・小石川の弥勒堂（みろくどう）という名の箔押し所（はくおしよ）でアルバイトをしたからである。大学の講義が無い時はいつ勤務してもよいという好条件だったため、米倉は三年近く続けることができた。会社は社長の弥勒田武吉とその妻、そして長男文武（ふみたけ）の三人に、アルバイトの米倉が加わる典型的な家内工業だった。社長は営業の外回りを受け持ち、現場はもっぱら社長の妻と文武、そして米倉の三人でこなした。小学生の娘は、いつも米倉と文武の近くにおいて本を読んだり玩具をいじって遊んでいた。

箔押しとは、本の厚手の表紙に金箔や銀箔を敷き、その上から熱を加えた金属活字を押しつけるもので、都内の箔押し所のほとんどは製本屋の下請けである。その弥勒堂は、毎日製本屋から届く表紙に、本の題名や著者名などを箔押しするのである。アルバイトの米倉の仕事は、表紙を一枚にひろげて所定の位置に金箔や銀箔を一枚ずつ丁寧に敷くことだった。米倉が箔を敷き終えると、文武は炭火で加熱された金属活字を上から垂直に押し当て、わずかながら焦げた臭いがたちこめるのを見計らって上へ戻す。それが終わると社長の妻は柔らかいブラシで箔の屑を払つのである。極薄の金箔や銀箔を親指と中指を使って一枚ずつ剥がし、それを息を殺して静かに表紙の上に載せるのは神経の疲れる作業だった。そのうえ、文武が生来の無口ときているから、共同作業はほとんど沈黙のまま一日が終わる。

単純でしかも沈黙の作業となると、時の経過は気が狂いそうになるほど遅い。一時間ほど仕事をしたと思って時計を見ると、まだ十五分しか経っていないことはよくあった。

「ところで、弥勒田さんはどちらの出身ですか？ 私にもあなたと同じ名前の知りあいがあるものですから」と米倉が言うと、彼女は「珍しい名前でしょうっ、よく訊かれるんで

すよ」と前置きしてから答えた。

「私の実家は文京区の小石川です。そこで製本の下請けを…、典型的な零細企業ですわ」「製本屋さんですか？」

「いえ、下請けの箔押し所です。箔押しっていうのは…」

やはりそうだった。この上品で美しい女性は、まぎれもなく米倉が学生時代にアルバイトをした「弥勒堂箔押し所」の娘、聡子（さとこ）である。

「やっぱり聡子さんでしたか。四十年ぶりですね。すっかり見違いちゃいました。私の」と、憶えていないでしようね？」と米倉が言つと、彼女は怪訝そうな顔で「もしかして、ヨネさんかしら」と答えた。

あの当時、弥勒堂の家族は米倉のことを「ヨネさん」と呼んでいたが、聡子がそれを真似て言つと社長の妻は「いけません。米倉さんと言いなさい」と叱つたものだ。あの時の幼い小学生が、いま美しく上品な女性に成長して目の前にいる。

「そう、アルバイトさせてもらった米倉理一です。奇遇ですね」

「ほんとですわ。あの時の米倉さんが都紀恵ちゃんの上司だなんて、世間は本当に狭いよね。都紀恵ちゃん、実はこの三ヶ月間ウチの店でアルバイトしてたんです」

「そういう関係でのお呼ばれですか。ところで、聡子さんのお店っていいますと？」

「実家の箔押し所は兄が継ぎました。私は神田の古書店に嫁に行つたんです。加藤古書店っていうんですけど…。私、本当は加藤聡子なんですけど、弥勒堂の娘ということで仕事が入ってくるものですから、外向けにはまだ弥勒堂の姓を名乗っているんです。ところで米倉さん、奥様や子どもさんは？」

来た。これだから米倉は人と会つのがいやなのだが、不思議と聡子の前では心の動揺もなく答えることができた。

「妻とは別れました。もう、二十年になります」

「あら、悪いこと訊いちゃったみたい、ごめんなさいね」

「慣れてますから…、それより古書店って？」

新郎新婦は、お色直しのため二十分もじつとしておらず、その間にケーキ入刀や友人たちの余興などに引つ張り出されている。披露宴は盛り上がっているが、米倉と聡子のところだけは完全に独立した空間になっていた。

「聡子さんのお兄さんとコンビを組んだ時、実は大変な事をやらかしましてね」

「それ、知ってます。ずいぶん後になってから兄に聞きました。表紙の前と後を逆に押し

ちゃったんでしょっつ」

それは米倉が弥勒堂でアルバイトを始めて一年ほど経った夏のことである。急に単行本千部の箔押し作業が入った。それは、製本が全て完了した本の表紙に金箔を施す仕事だった。いつもは表紙だけが束になって運び込まれるのだが、まれに完成本自体に金箔を押すこともある。米倉が社長と製本屋のやり取りを聴いたところでは、本の著者は当初「箱入りなので、本体の背表紙に題名と著者名が印字されていればそれで良い」と言っていたが、刊行直前になって「それだけでは寂しい気がするので、前表紙に金箔で題名と著者名を刻印した装丁にしたい」といい始めたらしい。箔押しとしては仕事が入ればよいわけで、その辺の事情はどつでもよいのである。その日、文武と米倉は朝から珍しく話が弾んでいた。

というのは、前夜に箔押し業協同組合主催の従業員慰安会がB公会堂で催され、弥勒堂から文武と米倉が参加したのである。慰安会には若手人気歌手が出演したため、二人は翌朝になってもまだその余韻に浸っていたのだ。そして、その「余韻」は弥勒堂にとつて命取りとなった。文武と米倉は金箔を後表紙に押ししてしまったのである。昼過ぎに外回りから戻った社長がそれに気づいた時、箔押しは既に九割近く終わっていた。

表紙と本体は強力な糊で接着されているから、表紙だけ剥がすのは不可能である。もし、無理に剥がせば損傷は本体にも及び、それは書籍としての体をなさない。社長以下四人は、凍りついた表情のまましばし言葉を失っていた。

しばらくして気を取り直した社長は、製本屋に表紙の前後を間違えたことを電話で伝えた。米倉は、必死に詫げる社長の涙声と受話器から洩れてくる製本屋の怒声を今も鮮明に憶えている。

「大変なことをしてしまいました。扉を逆にしちゃったんです。全部ウチで負担しますから、本体の印刷段階からやり直させていただけませんか？」

「あんだ、何を言ってるんだ。あれはW大の草田教授が執筆された論文でね、千部限定なんだよ。先生は来週の学会で百部をお使いになって、その後に学内の書店に並ぶことになってるんだ。先生は急いでおられて、『週末まで納本』っておっしゃるから信用ある弥勒堂に頼んだんじゃないか。こんなこと知ったら出版はカンカンだ。『弥勒堂がドジったもので』って言ったところ、何の言い訳にもなりゃしない。どつしてくれるんだ」

「申し訳ありません。ですから、印刷の版組みからすべて再製作ということで……その経費は全部ウチが持ちますので」

「ゼニ、カネの問題じゃない。何度も言っけどね、草田先生はそれを来週の学会で使っつ

ておっしやってるんだ。やり直している時間はないんだよ。もついい。弥勒堂とはもう付き合えない」

受話器を置いた社長の目は充血して真っ赤だった。弥勒堂の年商の殆んどはその製本屋からの受注によるものであり、それを全部失いつつあるのだ。米倉は社長に呼ばれ、「明日から仕事が入らないので、悪いけどもう来なくていい」と言われたのだった。

「責任の半分は私にあるんです。だから弥勒堂さんには本当に申しわけなくて、あれ以来一度も伺っていないんですよ。それで、その後、どうなりましたか？」

「兄の話では、その製本屋と縁が切れたそうです。夜になって父が金箔を逆に押した九百部と、まだ押していない百部を返しにいったら、『そんなものは要らない。全部持ち帰って』

処分しろ』と」

「戻されたんですか？ 一千部！」

「はい、結局ウチの焼却炉で焼いたそうです」

「全部ですか？」

「いえ、少しは残しました…、というのは、ウチでは昔から箔を押した本は必ず一、二冊は保存します。箔押業としての足跡を残すためです。兄は縁起が悪いからそんなものは全部燃やすってきかなかったそうですが、父は『表紙が逆になっている本も面白いじゃないか』って、十冊ほど…」

あの事件は弥勒堂にとって辛いものだったはずだ。しかし、聡子の表情はそれほど暗くはない。米倉がそのわけを質すと意外な答えが返ってきた。

「あれから二日後、製本屋がウチに訪ねてきて『この間は興奮して本当に悪かった。これまでどおり仕事を引き受けてほしい。それで、例の本を返してもらえないか』と。父が『あなたが全部処分しろって言うから全て焼却しました』と言うと、ものすごい剣幕で『バカやロー』って捨て台詞を残して帰ったそうです」

「でも、少しは残っていたんでしょ？ どうして全部焼いたって言ったんですか？ 復縁するチャンスだったのに」

「それは、母が父を説得したそうです」

「でも、社長は復縁する気はなかった…」

「はい、あの製本屋の怒声と罵声…、箔押し職人の父は年齢が一回り以上若い人からなじられて相当に悔しかったんだと思います」

「社長のプライドは傷ついたんですね。ところで、製本屋がどうして返してくれと？」

「それなんですけど、S出版直系の印刷所が火災に遭って草田教授の生原稿や印刷の版、それに印刷の残部が全部燃えてしまったようなんです。今なら原稿を「レバー」しておいたり、フロッピーディスクに保存したりするんですけど、四十年前だと、どこの印刷所も原稿を手持って活字を一つ一つ拾っていたんですね」

「原稿や印刷の版が全て火事で燃えてしまったとなると、S出版としては製本屋を介して弥勒堂さんが持っている原文を手に入れるしかなかった…」

「父は頑固ですから、いったん嫌いになるともう駄目なんです」

「いいじゃないですか、一寸の虫にも五分の魂…、あっ、失礼、一寸の虫なんて言っ

「そんなこと、気になさらないください。ところでS出版は何とか刊行にこぎつけ、草田先生への実害はなかったようだと言っていました」

米倉は結婚披露宴が終わると聡子を地下の喫茶店に誘った。

「きょうは本当にびつくりです。都紀恵クンの結婚式で聡子さんに会えるとは…」

「私も…。米倉さん、いま図書館にお勤めなんですよ。どっいうお仕事を？」

「購入図書の設定や新着図書の紹介…、それより、聡子さんがどうして古本屋さんに？」

「私、実は十二年前に見合い結婚したんです。主人は神田の古書店の一人息子でしたが、五年前に癌で亡くなりました。子どもは小学生の娘が二人います。書店の経営は主人に任せっぱなしでしたから一時は廃業も考えました。ところが、実家の兄が『続ける』って言うんです。一級の古書専門店として」

「一級の？ 資料的価値があれば定価の三倍、いや十倍で売る店です」

「私のこと、あこぎな女と思ってるんでしょう？」

「とんでもない、そういう本は貴重ですから。店には大学教授なんかがよく来るんですか？」

「そうですね、やはり先生方が…、学生さんはあまり来ません。高いからでしょうね」

聡子は夫の死後、二人の子どもと義父母の五人で暮らしていると言った。住居は五階建てのビルで、一階は古書店、二階を喫茶店に貸し、三階に義父母、四階と五階を聡子と子どもたちの住まいにしているという。また、二階の喫茶店からは家賃を得ており、古書店経営も順調で生活には困らないとも語った。

二人は夕方六時過ぎに喫茶店を出た。聡子は横浜の知人宅に泊まると言っ。米倉もはビールを飲みすぎたためか、疲れを覚えたので定宿であるJR上野駅近くのホテルNに泊ま

ることにした。明日は月曜日で図書館は休館である。

コンビニで菓子パンや飲み物を買ひ、ホテルには午後八時にチェックインした。

その夜、米倉はなかなか寝つかれなかった。四十年前は幼い小学生だった聡子が、いま美しい女性に成長して現れたのである。あれほど話が盛り上がっていたいながら、互いの連絡先を確かめないまま別れたが、いざとなれば神田の加藤古書店やK市立図書館に連絡すればよいと思ったのだ。

二 古書店

翌朝、米倉は九時前に目を覚ました。洗面をせず急いで食堂へ行き朝食をとった。このホテルは朝食を九時までに切り上げる割には、チェックアウトが十一時と遅い。

米倉はシャワーを浴び、髭を剃った後、再びベッドに横になった。あと一時間はゆつこく眠ることができる。まさに至福の時間である。

米倉がベッドでまどろんでいると、電話のベルが鳴った。チェックアウトの催促にはまだ早い。電話は聡子からだった

「どうしてここが？」

「一〇四でK市立図書館の電話を…、警備員さんが出て『きょうは休館日です』って。急用なので連絡を取りたいって言ったら米倉さんの自宅の電話を教えてくださいました。それで、お宅に電話したらお母様が出られて…、ちょっとまずいかなと思ったけど、何も悪いことしているわけじゃないし、『昨日の結婚式で一緒にした者ですけど、課長さんにお伝えしたいことがあります』って言ったら、『昨夜は上野駅前のホテルNに泊まりました。チェックアウトは十一時のはずですから、まだいると思いますよ』って。米倉さんのお母様ってすごいよね。何もかもお見通しなんだもの。とても八十過ぎとは思えないわ」

「電話でそんな話はやめよう。ところで聡子さん、いまどこから？」

「横浜の友達の家です」

「もしよかつたら会わないか？」と米倉が言うと、聡子はその言葉を待っていたようである。会う場所は聡子のビルの二階にある喫茶店にした。聡子はどこかのレストランで昼食を一緒にしたかったようだが、米倉は聡子の古書店をぜひ見たかったのである。

聡子のビルはJR水道橋駅から徒歩で十分ほどの所にあった。それは、やや古い五階建てで、二階の喫茶店専用階段がビルの横に付いている。一階の古書店は店主者が「朝帰り」のため、シャッターはまだ下りたままである。

喫茶店では五、六人の学生がみな無言で新聞や雑誌を読んでいる。

「三階には両親がいるんで、本当はここいやなんですけど…」

「でも、ご両親は子どもさんに朝ごはんを食べさせて学校へ送り出してくれたんだらう？
毛嫌いしちゃいけないよ」

「別に毛嫌いしてるんじゃないけど、私、米倉さんに久しぶりに会って胸がときめいて
るのかしら。それに、主人にも悪いかな…、いくら亡くなった人でも」

二人の会話は昨日よりはるかに打ち解けたものになっている。聡子はコーヒーを一口飲
むと真顔で言った。

「私、ここへ来る前に蒲田でホームに降りてみたんです」

「それじゃ、蒲田行進曲を？」

「そうなの。ホームに立ったまま電車を二本も見送っちゃった。あのホーム、ベンチが無
いんだもの」

「でも、どうしてそんな気に？」

「きのう、米倉さんが話してくれたでしょう？ ほら、発車ベルの代わりに蒲田行進曲の
メロディが流れるって。私、これまで何度も蒲田駅を通過しているのに全然気づかなかっ
たわ。米倉さんの話、本当だった。あの曲って、何となく楽しい気持ちにさせてくれるから
不思議ね。でも、ちょっと難点が…」

「難点？」

「そう。だって、曲がワンフレーズだけでしよう？ あれで終わっちゃうと、私、なんだ
か消化不良になりそう。もうちょっと聴きたいって思う人は結構多いと思うんだけど」

米倉もそれは感じていた。しかし、駅のホームでは乗降客へのアナウンスが主役であり、

「蒲田行進曲」はあくまで脇役である。

「聡子さん、そのことを蒲田駅に話してみたら？ 『もうちょっと長くして』って」

「そうね。ところで、私、思い出したんだけど、ウチの店に『検証（私家版）・蒲田行進
曲』っていう本があるんです。それ、誰が書いたのか憶えてないけど、実家で金箔を押し
てから兄が私に一冊くれたの。それ、一割引で店に置いたら即日売れちゃって。それを兄
に話したら、もう一冊よこして『定価の三倍でも売れるぞ』って。いくら私でもそこまで
あこぎじゃ…。でも、それを売った憶えはないから、まだ店にあるはずよ」

「聡子さん、その本読んだ？」

「最初のところ、それも斜め読み程度に。原作はビデオで観たわ。その本、『検証…』っ

て銘打ってるから、きつと風間杜夫演じる『銀ちゃん』は、実は俳優の『村助』で、妊娠して自分に払い下げられた松坂慶子は『田美』…と」

「もし、そうなら読んでみたいね。蒲田行進曲は創作だって言われて、『はい、そうですか』って素直に信じる人はいないと思っよ」

聡子は潤んだような眼で米倉をじつと見ている。米倉はあわてて聡子から視線をはずし「顔に何か付いてる?」と言いなながら頬を手でさすった。

「そうじゃないの。米倉さんて、亡くなった主人とそっくりだわ。顔じゃなくて…、好奇心が旺盛だし、何でもないような事にすぐくこだわる…」

よくよく考えれば、松竹映画「蒲田行進曲」に登場する人物のモデルは誰か、そして、その映画の主題歌が蒲田駅のホームでベル代わりに流れていることなど、どうでもいい事かもしれない。

米倉は聡子に亡夫と似ていると言われて返答に窮した。

「似てるなら光荣だけど…。」ご主人も『こだわり性』だったのかな。生前、ほかに何か面白いこと話さなかった?」

「そうそう、植村直己さんは雪洞を掘って生きているはずだ。あの人は普通の人間と鍛え方が違う。だから、鳥や動物を食って生きていると。ほかに、映画や音楽の話でも、時の社会や風俗に結び付けて話すから説得力があったわ。全国古書店業協会っていうのがあるんだけど、その機関紙にもしょっちゅう投稿してたけど、投函する前に私に『読め』って言うのよ。そして何でもいいから感想を言えと。何でもいって言うくせに私がクレームつけると怒るの。まるで子どもみたいな人だったけど、それも魅力だったかな」

「ご主人、いい人だったんだ。私といい友達になれたと思っよ」

米倉と聡子は昼食をサンドイッチで済ませると、一階の古書店に向かった。

「こんなに遅い開店は久しぶりよ。水曜日は定休だけど、それ以外は九時から夜は八時まで店は開けっ放し。父と母が時々店に出てくれるし、それに子どもの世話や炊事も手伝ってくれるから助かるわ」

店は、入り口以外の三方の壁は全部書棚である。書棚は脚立を使って本の出し入れをしなければならぬ高さまで続いている。ざっと見積もっても五千冊はあるようだ。店の前に立てるホワイトボードには本を紹介する細長いチラシが隙間なく張り付けられ、「H大学名誉教授、戦時下に著した軍国主義思想」、「最高裁 判事、任官前の左翼論文」などの文字が踊っている。

「この短冊、お客に分かり易くていいね。ところで、これは聡子さんが書くの？」

「そうなの。仕入れた本の概要をインターネットで調べて…」

「すごいな。それで、『蒲田行進曲』の検証本、早く見せてください」

昨日、米倉は駅のホームで「蒲田行進曲」を耳にしてから、その映画へのこだわりが一層増幅したような気がする。あの映画で風間杜夫が演じたのは何という俳優か、そして松坂慶子は…と、考えただけで胸の鼓動は早まる。

「これよ、米倉さん」と聡子が店の奥から「検証（私家版）・蒲田行進曲」を手に持って戻った。

「これが例の…、表紙の金箔は弥勒堂？」

「そう、兄が押したの。でも、売れなかったってことは、ちょっと値が高過ぎたのかな」

「値段はともかく、聡子さん、これの短冊は？」

「もう無いわ。でも憶えてる。えーとね『あの名作の裏に隠された驚くべき真実。著者渾身の検証』。でも、全部読まないで書いたから、いい加減だったかしら」

「その著者って、だれ？」と米倉が訊くと、聡子は本の奥付を見ながら「著者は…、キオマヤ・アメトモ（貴音真野・天知）さん。カナがふってあるわ」と答えた。

「キオマヤ・アメトモ？ それ、本名じゃない。音読みしてごらん。『キ・ネ・マ・の・天・地』だろっ？」

「ほんとだ、キネマの天地か。うまいペンネーム考えたものね。大部屋女優を孕ませて捨てた二枚目俳優の正体を暴くとなると、危なくて本名じゃ出版できないものね」

米倉はこの二十年間、図書館の蔵書課で毎日のように新刊本の情報に接しているが、これまでこの本のことは知らなかった。もしかすると、刊行直後に誰かが買い占めて市場に出回るのを防いだのだろうか。有名な芸能人、政治家、宗教家は、自分にとって都合の悪い本が出版されると、それを全て買い占めて流通を阻むということを米倉は聞いたことがある。

「この本は定価が千八百円、そして…加藤古書店では三千円か。ちょっと高いけど、買った！」

「あら、米倉さんからそんなに戴くわけにいかないわ。それに、この本は兄から買ったので仕入れ値はゼロ。結婚式で米倉さんの礼服にビールをかけたからクリーニング代を差っ引いて、三百円！」

「ふー、三百円、買った！」

「商談」は成立した。米倉は聡子からその本に加藤古書店のネームが入ったカバーをつけてもらった。帰りの東北新幹線はこの本を読んで、「一丁上がり」と思うと嬉しい。

三 再会

検証（私家版）・蒲田行進曲は、俗悪な暴露本の類ではなかった。著者の貴音真野・天知は、その論調から高名な学者であることが窺えるが、その正体を明らかにしていない。

著者は「トータルで見ると『蒲田行進曲』はフィクションであるとしながらも、風間杜夫や平田満、そして松坂慶子の三人が演じた人物はすべて実在した」と断言している。また、あのストーリーは昭和三十年代を背景にしているが、本当は二十年代でありその三人は既に鬼籍に入ったという。著者は三人の近親者への取材を丁寧に行い、故人の名譽を傷つけないよう表現に気を遣っていることが行間から窺える。そして、風間杜夫が演じた役は「範道妻五郎」、平田満は「三本松寛一」、そして松坂慶子は「日丘夢子」と名指した。しかし、ただ人物を当てるという趣向ではなく、戦後の日本映画を「徒弟制」という視点から「蒲田行進曲」を例に論評しており、米倉はこれこそ「戦後日本映画の一級史料」と感心した。

七月に入ってすぐに聡子から米倉に電話が入った。東京に出て来いという誘いであり、その声は弾んでいる。

「米倉さんのこと、実家の兄に話したらとても懐かしがってね、一緒にビールでも飲みたいてって言ってます」

米倉は聡子の兄文武に会いたいと思う。しかし、四十年前の「箔押しミス」は、いまも心の片隅から消えてはいない。まかり間違えば、あの事件は弥勒堂が破滅しかねない重大なできごとだった。結局、米倉は「蔵書点検月間」を理由に聡子の誘いを断った。ところが翌日になって聡子は再び電話をかけてきた。

「兄がどうしても米倉さんに会って話したいことがあるって言ってます。米倉さんが忙しいなら自分の方でK市に出向くと……、来週の水曜日」

水曜日は加藤古書店の定休日であるから、聡子の都合であることは明白だ。こうまで迫られると米倉は断れない。

「分かった。その日は午後から休暇を取るから、午後二時にK駅の中央改札口で……」と
言って受話器を置いた。

約束の日、米倉は聡子と文武をK駅前の小料理屋に案内した。文武は頭髪がすっかり禿げあがり、まるで別人のようになっていた。また、驚いたことにあれほど無口だった彼が能弁になっていた。

「オヤジが製本屋に幹部を返しに行ったら罵倒され、全部持ち帰った話は聡子から聞いたと思いますが…」

「聴きました。でも、後で返してくれと頼まれたけど社長は拒否したんでしょ？」 復縁する機会を社長は放棄したんですね。さすが明治生まれの真骨頂！」

「ところが…」と文武は言い、ビールをぐつと飲み干した。

「実はですね、オヤジは亡くなる三年前に私に言ったんです。バカヤローって罵倒された日の夜、オヤジは焼かずに保存していた本の中から八冊を製本屋に届けたそうです。その理由は、これまで弥勒堂が食べて来れたのは製本屋のおかげだ。ヨリを戻す気はさらさら無いが、絶縁する前に仁義だけは切っておこうと…」

米倉は、弥勒堂社長の意外な一面を見たような気がした。それまで黙っていた聡子は不思議そうな顔で兄に訊いた。

「草田教授の生原稿と印刷の版が燃えちゃったので、父が届けた本をもとに活字を拾ったってことかしら？ でも、それで版を組んだとして、印刷、製本、箔押しと、たった四、五日でできるのかしら」

米倉は、さすがは古書店を経営する聡子らしい疑問だと感心した。

「それは私も気になった。それで業界の知人を介して調べてもらったんだよ。それによると、当時のS出版は七つの系列印刷所を抱えていたんだ。それでオヤジが届けた本をそれぞれの印刷所に配って三十ページずつ印刷を分業させたらしいんだ。もちろん、製本や表紙の箔押しもそれぞれの下請け業者が分担したから、あつという間に出来上がったわけ。ところでヨネさん、ウチのオヤジはやっぱり『ヤクザ』でしたな。というのは、数カ月して製本屋の社長がウチに来て『復縁しないか』と。オヤジは『箔押しはイロハを間違えるような者に製本屋さんの敷居を跨ぐ資格はありません』って。格好いいですよ。そんなこと、オヤジは死ぬ三年前まで何も言わなかったんですよ。それで、実はこれからが本題なんです」

「本題？」

「そうですね。実は二年前に箔押し業界の機関紙に例の草田先生が随想を寄せているんですよ。題は『箔押し異聞』っていいんですが…、私は最近でも小さい字が読めなくて

…、聡子、ちょっと声を出して読んでくれ」

聡子は文武からタブロイド版の機関紙を受け取った。

「この記事ね。えーと、箔押し異聞、W大学名誉教授、草田幸一…、もう名誉教授なのね」

このとき、店員が「生ビールのお代わりはいかがですか?」と言いながら部屋に入ってきたが、三人のただならぬ雰囲気を感じたようで、すぐに出て行った。聡子は声を出して読み始めた。

「私は間もなく米寿を迎えるが、これまでの学生生活を振り返ると、どうしても忘れられないことがある。それは私が四十代の時に著した社会学の本にまつわる話で、その本は今も版を重ねているようだ。あの頃、私は世間から新進気鋭の学者ともてはやされ、有頂天になっていたように思う。そういう時は、思いがけない落とし穴が待っているものだ。その社会学の本が店頭に並ぶ直前、私は表紙に金箔で題と名前を入れることを思いついたのである。今の私なら装丁にこだわらないが、当時は自分を格好よく見せようという下心が働いたのだろう。ところが、箔押し屋さんには金箔を施す位置を間違えてしまった。具体的に言えば、前表紙と後表紙が逆になってしまったのだ。厚紙の表紙と本文は強い接着剤でくっついて、表紙だけをきれいに剥がすことはできない。そのことで件(くだん)の箔押し屋さんは大変つらい思いをしたと伝え聞いている。ところが、その箔押しさんの失敗は、私の学者生命を救ってくれたのである。というのは、印刷所が版の組直しを始めた時、私は念のため原文を読み直した。そして、大変な過ちを犯していることに気づいたのである。今だから話せるが、その一つは本文中のデータの数字が年度を違えて記載されていたこと。二つ目は、K大学のF教授が考察した一文を紹介する際に、カギ括弧をつけず、しかもその出典さえ明記していなかったことである。私は愕然とした。あのまま出版していれば、私の学者としての生命は完全に絶たれははずだ。そして、他人の論文を盗用したふとどきな学者として、一生後ろ指をさされながら生きなければならなかったであろう。

箔押しを間違え(てくれ)た業者さんは、私に「人生の大きな落とし穴」を知らせてくれた大恩人である。その箔押し業者さんの名はMさんと聞いた。いつかお伺いしてお礼を申しあげなければと思いつつ、とうとう四十年近く経ってしまった。今もご健在なら、ぜひお会いしたいものである」

聡子の朗読が終わった時、米倉の眼からぼろぼろと大粒の涙が溢れ落ちた。今まで自責の念に苛まれてきた事が、実は一人の学者生命を救っていたのである。聡子も声を上げて

泣いている。

米倉と聡子が落ち着きを取り戻したのを見計らって、文武は話を続けた。

「私、実は草田先生の家を尋ねました。先生、とても喜んでくれましたね、校了したばかりの本を私に見せてくれたんです。その本は『検証(私家版)・蒲田行進曲』…」

「蒲田行進曲?」と、米倉と聡子は同時に驚きの声を発した。

「意外でしょう? 社会学者の草田先生が映画の本を執筆するなんて。先生はこう言うんです。『私のような老いばれがいつまでも学会にはいけない。若い人たちが伸びるためには引退するのが一番いいんだ。私は昔から映画が好きなので、最近は戦後社会を映画を例に考察しているんだ。一般に学者というものは格調の高さばかり求めて、市井から遊離している。そんなものは到底社会の発展に寄与できるはずがない。私は、これから生きた社会学に余生を捧げるつもりだ。この本が世に出て、著者が私だと知れば弟子たちはきつとびつくりするだろう。それでいいんだ。これは五百部だけの刊行だが、そのうちの百部は弥勒堂さんに謹呈したい。それは私の感謝の気持ちだ。あとの四百部は弟子たちに分けてやるつもりだ』と」

四十年前の箔押しミスは、結果的に草田幸一という一人の学者を救った。そして、長い間こたわり続けた「蒲田行進曲」は、その草田が戦後映画史という形で評価・検証したのだった。

それらはすべて都紀恵の結婚式で上京したことから始まった。上京しなければ聡子との出会いも文武との再会も無かつたはずである。

K 駅で聡子が切符を買っている時、文武は神妙な顔で米倉に言った。

「ヨネさん、聞き流してもらっていいんですが、聡子のこと見守ってもらえませんか。

あいつ、一人で古書店をやってるけど、本当は不安でしょうがないんです。全国古書店業協会の幹事が二年後に聡子の店に回ってきますし、協会機関紙の編集を一人で出来るだろうかって、今から悩んでいるんですよ。聡子のこと、ヨネさんの視野の片隅に入れていただけませんか? あいつはヨネさんのこと尊敬しているようだし、結婚式でヨネさんに会ってから聡子は本当に変わりました。それまではいつ会っても疲れきった顔をしてたけど、今はあんなに生き生きと…。すみません。気に障ったら聞き流してください」

妹を思う兄の心情が米倉には痛いほど伝わってくる。

聞き流さないで考えます」

「聞き流さないって、何を？」という聡子の声が米倉の背後から聞こえた。

終わり